

架蔵『枕草紙春曙抄』の清水浜臣注について

山崎 正伸

架蔵の六冊本春曙抄については、別稿で、初期の春曙抄に関わるもので十二冊本の改装本であるということ、明らかにしたが、この本についてと、清水浜臣と前田夏蔭説の書き込みについて述べたい。

該本には次の四つの蔵書印が捺されている。

一、瓢箪型単郭「家」

二、丸単郭「雀」(雀へ国字〓鶴)全て「罍」と横になっている)

三、長円二重郭「義方」

四、丸単郭「柊のや」

一と二については、現在のところ明らかにできないでいる。三は、第一冊の後表紙裏に墨筆で「三輪處蔵」とあり、中に「三輪先生」宛の井上頼文から佐々木高行(天保元年―明治四三年)・細川潤次郎(天保五年―大正一二年)・法制学者・古事類苑編纂総裁)の詩に関する書状が一通挟まっております、三輪義方の蔵書印と認められる。四は、鳥野幸次氏(明治六年八月四日生・國學院大学卒・明治三〇年学習院大学教授)の蔵書印である。

また、該本には、「安政元甲寅年十一月鈴木直道蔵本にて写之畢 會田安昌」(第六冊後表紙表)とあって、會田安昌(天保三年―明治二八年)の手とみなされる藍筆で、春海(村田)・濱臣(清水)・景雄(三島)・雨岡(吉田)・夏蔭(鶯)・鷺園(前田)・春村(黒川)・安昌(会田)・盈(不明)・如虚子(不明)云という形で各々の説が書き入れられている。他

に、旁註云へ岡西惟中・萬云（萬歳抄）などが見られる。また、朱筆では、黒川大人（黒川真頼）・関根氏（関根正直）・義知（装束抄）云など、若干の書き入れが認められる。以下、具体的に一部を翻刻しながら、その有り様について紹介しよう。また、比較のため、鈴木弘恭『訂正増補枕草子春曙抄』全（以下、「鈴木春曙」と略称）・岸上慎二「武藤元信古注書入春曙抄」（以下、「武藤春曙」と略称）・岸上慎二「前田夏蔭書入春曙抄」（以下、「前田春曙」と略称）を併記補足する。（○数字は順番を示すために便宜的に付し、「一」印は改行「／」印は改行別項を、「（藍）」は藍筆、「（朱）」は朱筆を表す。猶【02】【03】【04】は、原形の形態に近いようにし、その他は注の頭から番号を付し、その順に翻刻した。）

【01】春曙抄一―發四丁裏上欄

①此草紙に山はそこく一川はそこくなどかける一おほし国々におほ一かる山河の名をしもぬきいて、かくきた一するより所あること一也今考るに其名一のことやうなると一をかしきと又ふる一くより哥によりもてはやしたる一となるへし（藍）／②此抄に地名の注一多くは八雲を引一て證としたれと一八雲は此草子を一より所にし其国一とあるもあやまり一多し（藍）／③河社に云く枕中一子となつけしよしは一彼草子のおくに一自らかける如し一顕昭のいはく後一たれかこれを枕一草子にせさらん一とこれは枕は常一にもてならずもの一なれば枕にもする一斗もてあそふ也（藍）

④黒川大人云枕中子一といふ名は内證の記一事といはんか如し一枕は表に立ぬ一よしに云へり（朱）

○「鈴木春曙」（發端四の頭注）

①「増」清水濱臣云。此草子に山はそこく。川はそれくなどかける多し。國々におほかる山川の名をしもぬきいで、かきたる。より所ある事也。今考るに其名のことやうなると。をかしきと。又ふるくより歌によりもてはやしたるとなるべし。／②又云。此抄に（春曙抄のこと也）地名の註おほくは。八雲御抄を引て證としたれど。八雲御抄は此草紙をよりどころにし。その國とあるもあやまり多し／③河社卷_{三十三}云。枕草子となつくるよしは。彼草子の奥にみづからかけるがごとし。顕昭いはく。奥義抄出て後たれかこれを枕草子にせざる人ある。とこれはまくらは常にもてならず物なれば。枕にもするばかりもてあそぶころなり

○「武藤春曙」(一二七頁下・一二八頁上)

①此草子(朱)に山はそこく川はそこくなどかける多し。國々におほかる山川の名をしもぬきいで書たる、より所ある事なり。今考ふるに、其名のことやうなると、おかしきと、又ふるくより歌によみ、もてはやしたるとなるべし。／②此抄(朱)に地名の註多く八雲を引て證としたれど、八雲は此草紙をより處にして其國と云も誤多し。／③河社(朱)に云く枕草子と名づけし由は、かの草紙の奥にみづからかけるが如し。顯昭の云く、後たれかこれを枕草紙にせざらんと、これは枕は常にもてならずものなれば、枕にもするばかりもてあそぶとなり。(※岸上注 鈴木弘恭の増訂枕草子春曙抄によると、この三個の注は濱臣の注のごとく考えられる)

④枕草紙とは内證の記事をいふ意、枕はマギクラの意にて寝るに用ふるもの、表だぬ意也云々 及本文評尺とも

○「前田春曙」(一六〇頁)

①河社云 枕草子と名づけしよしは、かの草子のおくにみづからかけるごとし。顯昭の後たれかこれをまくらざうしにせざらんといへるは、枕はつねにもてならずものなれば、枕にもするばかりもてあそぶ心也。／①へ安齋隨筆卷二にいはく、榮花物語(朱)活若校八オはわか御前の方に西の對にて見渡し給ふに、さらにもいはずきぬのつまかさなりて打出したるは、色々の錦を枕ざうしにつくりてうちおきたらんやうなり。かさなりたるほど一尺餘かゝりみえたり云々、此文によれば枕にせん料にいろくのにしきをいくらかさねて、さうしのごとくとちたるものを枕草子といふにや。かの清少納言が枕草子と名づけたるも、いろくの事を書かさねたる故にや。源氏若菜上、紅梅にやあらん、こきうすきすきぐにあまたかさなりたるけぢめはなやかに、草子のつまやうに見え、此草子に山はそこく、川はそこくとかけるおほし。國々におほかる山川の名をしもぬき出て書たる、より所ある事也。今考ふるに其の名のことやうなると、をかしきと、又ふるくより歌によみもてはやしたるとなるべし。／②此抄に地名の注おほくは、八雲を引て証としたれど、八雲は此草子をより所にしたるにて、其國とあるも誤りおほし。

【02】春曙抄一—一丁表(「春はあけぼの」)

此段を世に四季の文と云り
こゝに一年の事を概評して次の段々を引起さん冒頭とせり(朱)

春はあけほのやうく白くなりゆく 曙アケホ 吻同

まつ時節の景を書出

たり尔雅云春ハ為ニ青陽一

万物ハツセイ發生スはるはよろつの

物生する初めなれば發端にかけり此發端に

春は曙を賞していへる

少納言の心あらはれて

枕双帯一部の形容も

こもり侍るへし其次に

夏はよるを賞したる以下

下実に堀河百首六百番

哥合などにも春の曙

といへる題を出され侍り

其外哥にあまたよめり

むらさきたちたる雲の

曙の空のうす黒きに

日影うつろひて紫の色

めきたる也

春はあけほののイ(藍)。やうくしろくなりゆく 明ケントスルヘキケシキ(朱)

山ナリ(朱)はすこしあかりて。むらさきだち

山ニ接近セル空ヲ云(朱)

たる雲のほそくたなびきたる。夏は

よる。月のころはさらなり。やみもなを、ほ(藍)

のおほくイ(藍)。またたふたつほのかに打光りてゆくも(藍)

ほたるとびちがひたる。雨などのふるさへをかしい(藍)

おかし。秋は夕ぐれ。夕日。はなやかにし

のイ(藍)。日の入かたちかき也(藍)

て。山ぎはいとちかくなりたるに鳥のからす

ねどころへゆくとして。みつよつふたつ

なソどとびゆくさへあはれなり。まいて

まして鴈を面白きと也

鴈などのつらねたるがいとちいさくみゆる

いとおかし。日いりはてし。風のをと虫の

文林奇妙にや

鳥さへあるに

ひ(藍)

お(藍)

お(藍)

お(藍)

お(藍)

夏は夜 昼は暑氣の

堪かたければ夜を賞し

ねなハタイどハタイいとハタイ〇ハタイあはれなり。冬は〇ハタイ雪のふり

はたいふへきにもあらず翠朝イ朱 つとめてハタイイハタイ

はいふへきハタイにあらずハタイイハタイ

○「前田春曙」(一六一頁下)

山ぎは 山際にて、空の山に近づき接したる如く見ゆるあたりをいふ。旁註に、山ぎは、峯の事也。ふもとにはあらず。つらねつらならせて也。かくの如く他動の形にいふが、當時の文体なりし也。按源氏須磨卷に、かりのつらねてなく聲かぢの音にまがへるをとみゆ。

○松平静『枕草紙詳解』(以下「松平詳解」と略称)に、

この段は、後世これを、四季の文といひて、稱揚せるものにて、其措辭簡潔、僅かなる文字を以て、一年中の景色を寫し出したる手際は、餘程老練の筆致といふべし。所謂、わざとならぬおのづからの詞のほひとやいはまし。さてかく一年中の事を概評せしは、次々の段を引き起さん爲の冒頭とせしなり。古來よりの諸注に、この段を枕の冊子の總序なり、といはれたるも、理りにこそ。○やうく白くなりゆく山きは少しあかりて。やうくは漸々なり。山きは山際にて、空の近づき接したる如く見ゆるあたりをいふ。白くなり行くは、空の白み行きて將にあけなんとする景色をいふ。少しあかりては少し明るくなりてなり。○まいて雁などのつらねたるか云云いとをかし。とはまいてはマシテの音便つらねたる師翁曰くツラナラセテなり斯くの如く他動の形にいふが、當時の文體なりし也、

【03】春曙抄一丁裏〜二丁表(「ころは正月」一丁裏)

①本文「ころは正月三月四五月七月」の脇に

次二一年中ノ景氣ライハントテ先正月三月ト云ヒ次二一年ナカラト云ルオモシロシ(朱)

②頭注「七日は雪間のわかなあをやかに」の脇に

内蔵寮の官人が北野辺ナトニ行テ若菜ヲ摘テ奉ル（朱）

③頭注「七日は雪間のわかなあをやかに」とその上欄に

七日は雪間のわかなあをやかに 七田の若菜のあつ十物はもろこしより用る事也事文類聚トツテ上本ノ人田ニ採ニ七種ノ菜ヲ作ル薬モノノヲ
時記（藍筆にて抄の頭注を抹消）ノ歳時記云正月七日為一人日以七種菜為羹一萬葉廿一七日侍宴家持一水鳥のかもの羽いろ一のあ
を馬をけふ一みる人はかきりなし一といふ（藍）

④本文「里人はくるまきよげに」の脇に（一一二丁表）

此は清少納言未夕宮仕せさりし間の事を書る成るべし一宮城已外ヲ里ト云大臣已下ノ家族ナドナリ（朱）

⑤本文「中の御門のとしきみ」の上欄に（一一二丁表）

和名抄闕門限也和名之岐美一俗云度之岐美（藍）

⑥本文「さしぐし」の上欄

和名抄唐韻云梳一介都留細櫛也毘志反和一名保曾名刺櫛佐之之久（藍）

⑦本文「とのもりづかさ」の本文脇と上欄（一一二丁裏）

殿司令（藍）
とのもりづかさ
女ノ殿司ナリ（朱）

とのもりづかさ男女とも一にある官名ナリこゝは一女のかた也後宮職員一令云殿司尚殿一人掌一供奉輿織膏沐燈一油火燭薪炭之事

一典殿二人掌同尚殿一女孀六人（藍）

⑧頭注「白馬見んとて」の注の上に（一一二丁裏）

礼記ノ説ニ馬ハ陽物青ハ一陽色ナレハ立春之ヲミレハ一年中ノ邪氣ヲ払フトナリ一日本ニテハ孝謙ノ時始テ一行ハル天皇豊楽殿

一ニテ馬寮ノ引馬ヲ見一タマフ青色ノ毛ノ交一レル黒馬ナリサルニカゝル一馬ヲ二十一頭集ルハカタ一ケレハ後世白馬ヲ用一ル
(朱)

⑨本文「しろきものんゆきつかぬ」の上欄

和名抄一著^レ粉則太太白シ和名一岐毛之路一能(藍)

⑩頭注「中の御門のとききみ」の上欄に(一一二丁裏)

中御門宮城ノ四面ニ各三門アリ其中ノ中ノ御門一ニテ即朱雀藻壁偉一鑿待賢中ホ中ノ御門ナリ一サルニ中古西ノ京ノ方ハ一オトロ
ヘテ東京ノミ繁一昌シタレハ里人モソノ方一ニノミ住ミテ宮城ヘノ出一入モ此方ヨリスルトナリ一ケレハ遂ニ中御門ト云ヘ一ハ
待賢門ノトナル(朱)

⑪頭注「十五日もちかゆのせくまいる」の上欄に(一一三丁裏)

十五日粥モチガユ望ノ意一後ニハ望ヲ餅ニ誤リテ一粥ニ餅ヲ入ル一せくハ節句ニテ佳節一ニ供スルユエニ云(朱)

⑫頭注「かゆの木ひきかくし」の上欄に(一一三丁裏)

かゆの木庭トコノ木ノ一サキヲ四ツワリニシテ粥ノ一コゲツカヌヤウニカキマハ一スナリ此木ニテ打テハ息一災ナリトカ又子ヲ孕
ム一トカ云ナリ(朱)ノ粥杖とて卯木にて一作り先を四つにわりたる一ものなりともいふ一かゆを煮たる木を一杖にしたるをいふ
(朱)

⑬⑭の二つの注の間(一一三丁裏)

こたち 御達ニテ一老女ヲ云女房ノ内ニテノ老分ナリ(朱)

⑭本文「はへばへし」の脇に(一一三丁裏)

榮々シ賑ナリ(朱)

⑮本文「女房のつぼねなとに」の上部空白に(一一四丁裏)

夏蔭翁云つほねは一つほねるつほまるなといふ語より一いふ名にて一構えな一る處なればかくいふ也(藍)

⑯頭注「まうしぶみ」の上欄に(一一四丁裏)

本朝文粹朝野群一載等ニ申文ヲノセタリ(朱)

⑰本文「おもしろくさきたるさくらを」の脇(一一五表)

三月三日ノニ付テノ筆スサヒナリ(朱)

⑱頭注「花がめにさしたる」の上欄(一一五表)

花がめにさしたる 後撰一朱しかれあだにちるなと桜十花がめにさせれどつるひ一にけり貫之(藍筆で抄の注を抹消)

下文^{ウナ}清涼殿の二丑寅のすみ云々の段を一合てみるへし彼時の一さま少納言の心に(虫食い)しくおほ一えけんをこゝにもか一くかけるか大納言一伊周は則中宮の御一兄なり(藍)

⑲本文「まつりのころは」の上欄(一一五裏)

四月イ(藍) いとイ(藍) △无(藍)

○まつりのころはいみじう を(藍) おかしき。

△見奉る殿上人も一うへのきぬのこきう一すきはかりのけち一めにてしたかさね一とも同しさまにす一すしけにをかし(藍)

⑳本文「ほぞびつ」の上欄(一一六表)

ほぞびつ一此集^{ニテ}所一源氏野分卷東鑑(藍)ノ長櫃ノ細キヤウナル一ヲ云(朱)

㉑本文「けいしくつ」などのをすげさせ。」脇と頭注と上欄(一一六裏)

履子(藍)履(藍) 結(藍) 履子の緒也くつには緒なし(藍)
けいしくつなどのをすげさせ。

清へシ二物也(藍)

けいしくつなどの一此草紙の奥にも高き一けいしをさへはきたればと有一番の類也和名集品々の十番の類あれども此名はなし

履糸風俗通云一延喜年中京師長一者皆著履云々(藍) / けいしとくつと二物一也故にをすけさせう一らをさゝせといへり(藍)
和名抄云履漢語一抄云京都々計乃一阿之太一云履子一とあり按履音奇一逆反ケキなれば音便一にてけいしといへる一也履糸和名
阿一之太乎○又按加茂一祭古圖にあした一の如きものをはけ一るはけいし成へし(藍)(以上一六表上欄) / 雅亮抄云一けいしはは
りはかま一をきてそてを一はさみてわきな一かのおこめ打衣ひ一とへをきておひを一してその上にもを一しもつかひのやうにき
てつほとりたる一也これもあしたを一はくさいしをさ一したりあふきを一さす云々(藍)(一一六裏上欄)

②本文「おどりてありくものども。」の脇

おどりてありくものども。

をとりくるうて悦て其日を待しなり(朱)

③本文「のともして。つくろひありしもおかし」の脇と上欄

のともして。つくろひありしもおかし

△蔵人思ひしめたる一人のふとしもえならぬか其日あをいろ一きたるこそやかて一ぬかせてもあらは一やとおほゆれあやな一ら
ぬはわるき(藍)

○「松平詳解」(「櫻の巻」五頁)

②師黒川翁曰此日は、内藏寮の官人等がみな打そろひて、北野あたりの野邊に行きて、雪間に萌え出でたる若菜を摘み来て、朝廷の御覽に供へ奉る御儀式あるなり。 / ④師曰ふ里と宮城以外をいふ也。其處に邸宅をしめて住める大臣参議など然るべき人の家族を云ふ。
 / ⑧支那の禮記の説に、馬は陽物にて、青色は陽の色なり。されは立春に之を見る時は、一年の邪氣を拂ひて安全息災なるよしをいへるより、其れを取りてあを馬を見る事をは式例とせられし也。我國にて初めてこの式を行はせられしは、孝謙天皇の御代なりといふ。

未だ詳に知りがたし。正月七日天皇、豊樂殿に御出御なりて、馬寮の引馬を見玉ふと。さて白馬はアヲウマにて、黒き毛の馬に青き毛の交り生ひたる者をいふ。さてその毛色の馬をは二十一頭集むる定にて、其集め方甚だ困難なるより、いつの時代よりか、その代りに白馬を用ふる事とはなりぬ。／⑩中御門とは宮城の四面に各三門つゞありて其三門の正中にある門をいふ。即ち朱雀門、藻壁門、偉鑿門、待賢門、はみな中御門なり。されとこれも初の程こそあれ中古に至りては西の京の方はいたく衰へて住む人も少くなりたれば、里人なども大かた東の京の方へ移り住むやうになりて、東の京はいたく繁榮せるより、宮城へ参入するも、みなこの京の方よりせり。されば中御門といへは遂に待賢門の事をいふに至れり。／⑪十五日は望もちの日にて、この日煮る粥をモチカユといふ、而るに後の世に至りてはモチを餅に誤り心得て、小豆の粥に餅を入れて食ふことゝなれり。

⑫師黒川翁いふ。かゆの木はニハトコノ木の先を四つ割にして、之を以て、粥の焦けつかぬ様に掻きまはす爲に作れるものなりと。さてこの木にて尻を打たれたるものは其年は息災安全にして、また婦人なれば子を孕むといひならはせり。

⑬ごたちは御達ごたちにて女房の内にて年老いたるをいふ。／⑭師黒川翁曰ふはえは榮はえにて榮さかゆるものは賑ははしきものなればその意に轉したる詞なり

○関根正直『枕草子集註』（以下、「関根集註」と略称する）

□夏蔭翁云いはひは、今日加階任官などしたる女房の許に、人の祝ひごとし、里方へも、内より車走らせなどするなるべしと。／⑫濱臣翁云、粥の木は接骨木ニハトコの先を四つわりて用之と。

○「武藤春曙」（二一九頁）

⑦とのもりつかさ 男女ともにある官名なり。こゝは女のかたなり。後宮職員令云、殿司 尚殿一人 掌供奉輿撤膏沐燈油火燭薪炭之事典殿二人 掌同尚殿女孀六人／□濱の雪により「いかばかりなる人云々、こゝは清少のいまだ入内せざりし頃の事を、立かへり書けるにや。此文にてさおもはる。」／⑬濱 下文十九丁ウ 清涼殿の丑寅のすみ云々の段合せみるべし。彼時のさま少納言の心にしみておマかしく覚えけんをこゝにもかくかけるか。大納言伊周は則中宮の御兄なり。

○「前田春曙」(一六一頁下・一六二頁上)

【04】春曙抄一一十六丁裏「山は」(①②③④(藍)は、十六丁裏の頭注 ①〜⑱(藍)は、実際は①〜⑱)

⑤ このくれ山 万葉集古能久山は

礼山家持卿の哥により但 小倉山城嵯峨也 大和春日にあり

其国はしれす。八雲御抄云 にくらやま みかさ山 このくれやま わす

木の晴山清輔抄清少納 ずのイ(藍)八雲抄にも国不知 鹿背山山城也 未勘

言云々是は陸奥也是にや れ○山 いらたちやま かせやま ひはのやま 「十六ウ

わすれ山 未勘但八雲御抄

⑥ にわすれず山 陸奥とあ かたさり山こそ誰に所をお(藍)きけるにかとおか

りこれにや

⑦ かたさり山 八雲にもありて しけれ ⑤ いつはたやま ⑥ のちせの山 ⑦ かさ

国不知誰シレタレに所トコロをきけるに

かとは方去カタサリといふ名に付て どり山 ひらのやま とこの山は わが名もら

⑧ 人に所をさり退きたるやう

なればたはふれいへる詞也 すなとみかどのよませ給ひけんいとおかし

いつはた山 五幡山越前也 伊吹近江也 ⑧ ⑨ こそ見るかおかしき

のちせの山 若狭なる後瀬 いぶき山の活 あさくらやまよそに見るらこそマ(藍)んいと

のやまとうたによめり 山城の石田小野ノと同所にや 大比礼山津の国也

とこの山 鳥籠山近江也 おかしき ⑩ いはた山 おほひれやまも を(藍)おかし

わか名もらすなとみかとの

まひ人イ(藍)

古今集墨滅哥 あめの帝

りんじのまつりのつかひなど思ひ出らるべし

⑨ あふみのうねめに給へるうた

大和 大和

犬上のとこの山なる名とり

⑩ たむげ山 みわのやまいとおかしをとほ山

河いさとこたへて我名もらすな

摂津也

大和 陸奥也只末の松と計もあり

⑩ あめの帝とは天智天皇と

⑫ 待かね山 玉さか山 耳なし山 すゑのまつやま

付 ⑭

古今目録にあり。清輔袋

葛城大和也 美濃御山濃州也 柞山山城と八雲にあり

双帟〔紙〕には聖武天皇可成云々

⑮ かつらき山 みの、おやま は、そ、(藍)やま くら

貼 ⑯

⑪ あさくら山 筑前に朝倉山

⑮ る山 きびのなかやま あらし山 さらし

更級信濃

あり背筒に朝暗山あり

姨捨信濃 山城

りんじのまつりのつかひ

石清水の臨時祭三月

なやま をはすて山 をしほ山 あさま、(藍)やま 「十七才

⑫ 中ノ午ノ日也江次第ノ六ニ曰ク臨時ノ

未勘 帰山越前也

祭〔起〕天慶四年四月廿七日

かた、め山 かへるやま いもせやま

平ノ将門乱逆ノ報賽也 又曰

⑬

⑬ 舞人自〔上〕退到〔二〕竹ノ臺ノ東〔次〕右ノ祖進舞〔二〕求子〔一〕。畢舞人自〔下〕退〔大〕比礼〔後〕使舞人退〔出〕畧記

此まつりの試楽〔シガク〕にも當日にも舞人まひをはりて大比礼といふ物をうたひ侍る事ある
によりて。おほひれ山といふにりんじのまつりの使ひなど思ひ出るといふなるへし

音羽山 山城山科にも清水の上にもあり ひえのやまにもあり

くらゐ山 位山飛驒也 きびのなかやま 吉備中山 備中也 あらし山 山城也

いもせ山 妹背山 八雲御抄に紀伊国とあり ⑬

①萬十九(十五)(與食) 長哥許能一久礼罷四月之立者同一卷 長哥許能久礼一繁思乎同卷 長一哥二上山尔許能久一礼乃繁溪辺乎此一のほと猶多きを皆木陰の意也地名一にあらすこゝに山の名として出せる一は清少の誤か(藍)／②六帖一みちのくのおふくま河一のあなたにや人わす一れすの山はさかしき一伊勢集一としふれはいつかわれ一こそわすれすの一濱ママ千鳥ふる云々(藍)／③古今集一川風寒し衣かせ山(藍)／④ひはの山ひえの山一のあやまり也(藍)／⑤後撰集離別一よみ人しらす一君をのみいつはた山一と思ひこしなれと一ゆきゝの道ははるけ一からまし一新古今別 伊勢一忘なん世にもこしち一のかへる山いつはた人にあはんとすらん続後拾遺秋上家隆一かへる山いつはた秋一と思ひこし雲ゐの一鴈も今やあひみん(藍)／⑥萬四坂上大娘贈家持哥一かにかくに人はいふとも一わかさなる後せの山の一後もあはん君(藍)／⑦六帖雨はふる道はまとひぬ一山科の笠とり山や一いつこなるらん(藍)／⑧六帖なほさりにいふき一の山のさしも草さしも思はぬ事にやは一あらぬ又此草子の一異にいふまことや一下野へ下るといひ一ける人に一思ひたにかゝらぬ山の一させも草たれかいふ一きのさとはつけしそ一とあるも下野の地名一によせていへり又一美濃に同名有(藍)／⑨六帖夫木一昔みし人をそわれはよそ一にせしあさくら山の雲ゐ一はるかに一夫木匡房一ほとゝきす雲ゐはるかに一名のれはや朝くら山の一よそになくらん(藍)／⑩六帖一いつくにかありときゝしはいはた山君か心のなれ一る也けり(藍)／⑪萬四紅葉をも花を一もをしむ心をはたむ一けの神そしらまし一六にも十二にもあり(藍)へ十七丁裏頭注／⑫六帖一津のくにのまつかね山の一よふこ鳥なけと今来一と人もなし詞花春一こぬ人をまつかね山の一よふことり云々(藍)／⑬忠見集云昔かたらひし一人のことしありて一津の国玉坂といふ所に一ありけるを聞つけて一たくれにすゝむしの一なくをよめるたま一さかにけふあひみれ一はすゝむしは昔なから一の聲を聞ゆる 又一六百番哥合に頭昭か一たらひし我こひ妻や一ほとゝきす玉坂山に一聲のほのめく又拾一玉集あひみてもまた一まつほととの久しさは一たまさか山になく時鳥(藍)

へ十七丁表本文貼り紙／⑭萬一かく山はうねひをゝしと耳なしと云々古今俳諧よみ人しらす一耳なしの山の口なしえてしかな云

々後撰恋六うたの野は耳なし一山のよふこ鳥よふこゑにたにこたへさるらん（藍）／⑩六帖衣手の色まさりつゝ信濃なるくらゐの山は君かまにく／按に一信濃なること此歌にて明也飛驒のするはあやまり也（藍）／⑪十七丁表本文協注／⑫伊せ集思ひ出るみのゝを山の一松契し事は今もわすれす一新古今にいつもわすれすトアリ（藍）／⑬古今大哥所まかねふくきひのおひにせる云々（藍）／⑭十七丁裏本文協注／⑮古今別こしへまかりける人によみて遣しけるとしきたかへる山ありとは聞と春霞一たちわかれなはひしからまし（藍）／⑯萬九おほなもちすくなひこなにつくれりしいもせの山をみる一はしよしも古今恋五なかれては妹せの山の中に落る云々（藍）

○「武藤春曙」によると、①・②・③・④・⑥・⑦・⑩・⑭・⑮の十項目は同一で、⑩の一項目については記載がない。

⑪の一項目は、「⑪萬十二 よそにのみ君をあひみてゆだすき手向の山をあすかこえなん。猶多し。（一ノ十七オ 上欄）一三二頁下」と、別の例歌が上げられている。そして、架蔵本には、次の七項目について例歌が増補されている。

- ⑤ へ以下ナシ 続後拾遺秋上……
- ⑧ へ以下ナシ 又此草子の……
- ⑨ へ以下ナシ 夫木匡房……
- ⑫ へ以下ナシ 詞花春……
- ⑬ へ以下ナシ 又一六百番哥合に顕昭……
- ⑭ へ以下ナシ 後撰恋六……
- ⑮ へ以下ナシ 新古今……

【05】春曙抄二一五丁表六行目く九行目本文協注（すさまじきもの／二一丁表）

（しは）すのつごもりのなが雨
次のたゆるものゝさうじの日のおこなひト云下ニ入ルベシ（朱）
「△一日ばかりの

さうし
しやうじんのけだい」とやいふべけん

乳のたらぬ事也
はつき
八月のしらがさね ちあへず成ぬる（めのと）
上ノ三四月の紅梅のきぬノ下ニアリ本ヲヨシトス（朱）

○「松平詳解」(「桜の巻」一二五頁)

○一日ばかりの精進のけたいとやいふべからん。師黒川翁いふ。これは他よりまぎり來りて、こゝに入れるものなり。削るべし。○八月のしらかさね、ちあへずなりぬるめのと。この二句は、このすさまじきものの初、三四月の紅梅の次に入るべしと師黒川翁の説なり。

【06】春曙抄二丁裏上欄(「小一条院をは今内裏といふ」二丁十庭表)

①芹摘し一濱臣按綺語抄一俊頼口傳にいへる故事一也昔よりいひ傳へけん一獻芹の本文はこゝには一あたらずこゝにみすの一もとにあつまり出て一とあるにても思ふへし一袖中抄六可考(藍)／②綺語抄二昔イヤシキ男アリ一極メテ高貴ノ人ノ女ヲミソ一メイカニモ思ニタヘカネテウ一カゝヒミルニ折シモ芹ヲツ一ミ居タリ其男コレヲミテ一カナハ又恋ノセメテモノ心ヤリ一へ以下本文梓内の行間〓ニ恋シキトキ〓ニコレヲ食ヘリト云フ話アリ此男ハカゝルアヘナキ一〓心ヲナクサメタレト今清少ハ現ニ天皇皇后ニ咫尺シ奉テサル思モ一ナシトナリ(朱)／③或人あらはにのハをわの一訛にて荒鰐かといへり(藍)

○「武藤春曙」

①せりつみし 濱云 仲實綺語抄、俊頼口傳にいへる故事也。昔より云傳へけん獻芹の本文はこゝにはあたらす。こゝにみすのもとにあつまり出てとあるにてもおもふべし。袖中抄六可考、／③或人^(朱)あらはにのハをわにて荒鰐かといへり

○「松平詳解」(「桜の巻」一四六頁)

②綺語抄二昔イヤシキ男アリ一極メテ高貴ノ人ノ女ヲミソ一メイカニモ思ニタヘカネテウ一カゝヒミルニ折シモ芹ヲツ一ミ居タリ其男コレヲミテ一カナハ又恋ノセメテモノ心ヤリ一へ以下本文梓内の行間〓ニ恋シキトキ〓ニコレヲ食ヘリト云フ話アリ此男ハカゝルアヘナキ一〓心ヲナクサメタレト今清少ハ現ニ天皇皇后ニ咫尺シ奉テサル思モ一ナシトナリ

【07】春曙抄三丁表〓四丁表(「池は」三丁三丁表)

①萬十一一かつまたのいけは一我しるはちすな一し云々(藍)／②履仲紀二年十一月作磐余池(藍)／③萬廿一とほたほみしる一はのいそとにへの一うらとあひてし一あらはこともかゆ一はん 此にへの浦一はつくし也(藍)／④萬十六一みゝなしの池

しうらめし云々一此みゝなしの池を一後にみつなしと一轉していふにや（藍）／⑤濱臣按更科日記初度の初一瀬まうての条にへのゝ一池のほとりにいきつきたれば云々（藍）／⑥（頭注空白）安昌按蜻蛉日記上初瀬詣の所に一へのゝ池いつみ川などいひつゝ一鳥ともゐたりなるとしたるも心一にしみてあはれにをかしう一おほゆともみゆ（藍）／⑦おまへの池一住吉の神前の池一をおまへの池といへるか摂津国におまへの濱おまへの一沖おまへの灘あり一ておまへの池なし（藍）／⑧雨岡云おまへの濱一おまへの沖おまへの一灘ともに住吉郡一の住吉にあらず一同国兔原郡の住一吉にて古くよみ一来れるすみのえ一と別処也和名抄一ニ兔原郡住吉と一ある処にてそこ一にも住吉の神の御社一ある也（藍）⑨鏡の池美濃近江一夫木謙徳公一おもかけに見つゝを一をらむ花のいろを一かゝみの池にうつ一しうゑては（藍）／⑩六帖一むさしなるさやま一の池のみくりこそ一云々河内に同名一あり続紀天平一四年十二月丙戌一築河内国丹比郡一狭山下池（藍）／⑪古事記垂仁天皇一條云作血沼池又作一狭山池云々（藍）へ三一四丁表上欄⑫和名抄一河内国丹比郡狭一山佐也一神名帳狭山神社一書紀崇神天皇一六十二年秋七月詔一曰云々今河内狭山一埴田水云々／⑬続紀天平宝字一六年四月河内一國狭山池堤決一河内志に丹南郡一狭山池在狭山村一錦郡村天野小山一田二溪瀦瀦于此為一池周廻一里許（藍）／⑭堀河後百首に一春深き狭山の池一のねぬなはのく一るしげもなく蛙なく也（藍）

○「鈴木春曙」（七一・七二頁）

①「増」濱云万十二マニ「かつまたの池は我しるはちすなししかいふ君がひげなきがごと」／④「訂」濱云耳なしの池にや然らば大和也。万十六「みゝなしの池しうらめし云々。此耳なしの池を後にみつなしと訛りたるにや」／⑤「増」への池の誤なるべし。更科日記にも初瀬詣の條に見えたり／⑩⑬「増」さやまの池は。武藏國なれども又河内國にもあり。古今六帖に「武藏なるさやまが池のみくりこそ」云々／又續日本紀云。天平四年十二月丙戌。築河内國丹比郡狭山下池云々／「増」みくりは。古今六帖に「武藏なるさ山が池みくりこそひけばたえすれわれやたえする」とあり

○「関根集註」

①「補」濱臣云、万十六「かつまたの池は我しるはちすなし然いふ君がひげなきがごと」／⑤「補」濱臣云、更科日記初度初瀬詣

の條に見えたり／④「補」濱臣云耳なしの池にや、然らば大和也。万十六「みゝなしの池しうらめし云々。此耳なしの池を後にみづなしと訛りたるにや／⑧吉田兩岡云、お前の濱、お前の沖、ともに住吉郡の住吉にあらず。同國兔原郡住吉にて、古くよみ來れる住のえとは別也。和名抄に、兔原郡住吉とある所にて、そこにも住吉の神社あり。／⑩⑬「補」濱臣云さやまの池は。武藏國なれども、又河内國にもあり。古今六帖に「武藏なるさやまが池のみくりこそ云々」又續日本紀云、天平四年十二月丙戌、築河内國丹比郡狭山下池云々／「補」濱臣云、古今六帖に、「武藏なるさ山が池みくりこそひけばたえすれわれやたえする」とあり。

○「武藤春曙」(一三七頁下・一三八頁上)

①萬 十二 ^{マエ} かつまたの池はわれしるはちすなししかいふ君がひげなきがごと。／②履仲紀二年十一月作磐余池。／③萬 廿とほたほみしるはの磯とにへの浦とあひてしならばこともかゆはん。此にへのうらはつくしなり／⑤濱按 さらしな日記初度の初瀬まうでの條に、にへの、池のほとりにいきつきたれは云々／④萬 十六 みゝなしの池しうらめし云々 濱云 此みゝなしを後にみづなしと轉じいへるにや。／⑦おまへの池 濱本 住吉の神前の池を おまへの池といへるか 攝津國におまへの濱、おまへの沖、おまへの灘ありておまへの池なし／⑧兩岡云 ^{マエ} おまへの濱、おまへの沖、一の灘、ともに住吉郡の住吉にはあらず。同國兔原郡の住吉にて古くよみ來れる住のえとは別なり。和名抄に 兔原郡住吉とある所にてそこにも住吉の神社あるなり。／⑨かゝみの池 美濃 近江 ^{マエ} 夫本謙徳公 おもかげにみつゝををらむ花の色をかゞみの池にうつしうゑてば。

【08】春曙抄三十二丁表・裏上欄(「むしは」三十二表)

藻塩十三八雲云一鬼の子のみの虫一これは此草帯一によりていへる一也云々(藍)

鷺園翁云みのむしはなくものに一あらず後世哥一にもなくよし一よめるはみな一此物語より出たる事也此比一の諺にかゝると一をいひしなるへし(藍)

○「鈴木春曙」(八二頁)

「増」濱按。藻鹽草云。八雲云鬼の子のむし。これは此の草子によりていへる也。

○「武藤春曙」(一三八頁下・一三九頁上)

寂蓮法師 ちぎりけんおやのころもしらずしてあだのわたのむみの虫の聲 濱云 此うたは此草紙にすがりてよめるにて其原は別に故ありしなるべし。此草子七ノ十四 鬼(朱)はらはの事参考すべし。

○「前田春曙」(一六六頁下・一六七頁上)

夏蔭按 現存六帖正三位知家 我背子が來ぬだにつらくせのおとにさこそはななめ秋のみのむし。とよめるもこゝによりていへるなるべし。

【09】春曙抄三十三丁表本文六行目左書入(「むしは」一三十二表)

にあゆみて 萬本にかくあるは一よしと鶯園翁一はいはれき(藍)

【10】春曙抄三十三丁表上欄(「わかき人とちこはこえたるよし」三十二表)

鶯云つちにをるも一のとはいといやしけ一なるものをいふなる一へし(藍)／安昌按に師の考一いとよし続世継し一きしまのうちきゝ一の巻につちにを一かてとかくのこ一までさたして一云々とあるは師賢一の弁か思へる女の一死後のことをねん一ころにするをいふ一にていやしきものゝ一おのれひとりなす一をいへりと聞ゆ(藍)

【11】春曙抄四一六丁表上欄(「心ちよげなるもの」四一六表)

夏曰卯杖のことぶ一き夫木集に卯杖一ほかひきこしめし一てといふことかき一にて花山院の一御哥あさまた一きいのる卯つゑ一のしるしあらは千一年の坂もゆかさら一めやはとあるをも一て按するに卯杖一もて悪をさり一善をまねくため一のほきこと也 安昌按に栄花一つほみ花の巻に一うへいつらはわか宮一はとゝとはせ給へは一命婦のめのといた一き奉りてまる一る中暑いたきとり一奉らせ給ひて一もちひかゝみ見せ一奉らせ給ふとて一きゝにくきまで一いのりいはひつゝけ一させ給ふことゝもを一おまへにさうらふ一人ゝはえねんせず一おのつからうちさゝ一めきうつゑほか一ひほかひなといふ心一ちこそすれとて一わらふを云々と一あるにてもその一さまは九(瓦)にしらる(藍)

○「関根集註」(二二五頁)

「補」夏蔭云、夫木抄一卯杖ほがひを聞こしめして、花山院御製「朝まだき祈る卯杖のしるしあらば千とせの坂もゆかざらめやは」卯杖をもて、安らかに齡のべむかし。など言ほぎせるにや。

○「前田春曙」(一六八頁下)

夏蔭按 夫木抄一 卯杖ほがひをきこしめして 花山院御製 朝まだき祈る卯杖のしるしあらば千とせの坂もゆかざらめやはとみゆ。卯杖をもて安らかに齡のべむよしなどことほぎせるにや。

【12】春曙抄五―廿三丁裏六行目(「五月の御さうしのほど」一五―一八丁表) 上欄

如虚子云すくせ一なき日なりと句一うじては倦して也(藍)

○「鈴木春曙」(中二九頁)

如虚子云。春曙抄の註非也。とは上につけて見るべし。すくせなき日なりと。句也。うじて也。うじは倦じなるべし

【13】春曙抄六―二丁表頭注五行目―十七行目(「つくも処の別当する比」六一―一丁表) 上欄

①濱云いかてかあはれ一見奉らはやとなり一また句いかてか句一と見るへし(藍)／②春村按積善寺一供養之事見日本紀畧正畧五年一二月二十日ノ条(藍)

○「鈴木春曙」(中三八頁)

「増」濱按。いかてかあはれ見奉らばやと也。まだ句 いかてか句 と見るべし／「増」春村按に。積善寺供養之事。日本紀畧。

正曆五年二月廿日の條に見ゆ

【14】春曙抄六―十二丁裏二・三行目(「もりは」六一―十二丁表) 上欄・頭注空白

①こゝひの森一拾 哀 顕光一こゝにたにつれ／と一なく郭公まして一こゝひの森はいかにそ一(藍)／②木からしの森一六帖(藍)／③いはせの森一新勅(藍)／④うき田のもり一萬十一一大あら木のうき田の一もりのしめなら一なくに(藍)／⑤かうた

ての杜一加茂に神館カウタテの二杜ありもしくは一それか(藍)／⑥安昌云日本後紀山城国綴喜郡上達一池 蜻蛉日記中巻初瀬詣の条にかうたてのもりに車とゝめて一とあり是か(藍)

○「鈴木春曙」(中五一・五二頁)

①「増」濱云。拾遺哀に右大臣顕光「こゝにだにつれくとなく郭公ましてこゝひの森はいかにぞ」／②「増」濱云。古今六帖「人しれぬ思ひするがの國にこそみをこがらしのもりは有けれ」／③「増」濱云。新勅撰夏に田原天皇「神なびのいはせのもりの時鳥ならしの岡にいつかさなかん」／④「増」濱云。万十一「かくしてやなほやみなん大荒木のうきたの森のしめならなく」／⑤「増」濱云。加茂に神館の杜ありもしくはそこか

○「武藤春曙」(一四八頁)

①(朱)こゝひの森 拾 右大臣顕光 こゝにだにつれくとなく時鳥ましてこゝひのもりはいかにぞ。／②木からし 六帖 人しれぬおもひするがの國にこそ身をこがらしのもりはありけれ。／③いはせの森 新勅 田原天皇 神なびのいはせのもりのほととぎすならしの岡にいつかさなかん。／④萬 十一 かくしてや猶ややみなん大あらきのうきたの杜のしめならなくに。

【15】春曙抄六一十七丁表・本文十一・十二行目(「正月に寺にこもりたるは」六一十五丁表) 上欄

ふみをさげてらいはん礼服にむかひて。〇〇(藍) ひ(藍)い(藍)
論議誓にヤ
〇〇〇〇(藍)
動満也騒動する也
ろぎちかふも。さばかりゆすりみちて

てひろきは一手廣歟(藍)／安昌云手廣もさ一ることなから是は一らいはんにむかひて一句ひろきちかふも一如是にてひろき一とは落窪物語に典薬頭かことを一云る条に立居一ひろくほとに又一たちるひくろきて一などあるいつれも一身のふるへるを云へればこゝもねんころ一に身をふるはして一誓さまをいふか(藍)

【16】春曙抄八一三丁裏(「うつくしきもの」八一三丁表) 上欄

〈頭注〉さりのつほ 玻璃ハリ壺にや一まとはと五音通する也一貨源クハゲンニ云ク玻璃ハ水玉也。或云一千年ノ氷化ナルノ下(藍筆消去線)

①景雄云さりのつほ一仏舍利を玉壺に一入たるが見ゆる也一今も多くしかする也(藍)／②盈云人はへとのみ一にては聞えかたし一人そばへと有し一その字落し一成へし上文そばへ一たる小舎人わらは二云々／萬四一伊蘇婆比座与伊一加流我等此米等(藍)

○「鈴木春曙」(中一〇五・一〇六頁)

①「訂」景雄云。さりのつほは佛舍利を玉壺に入たるが見ゆるをいへる也。今もおほくしかする也／②「増」盈云。人ばへとのみ一にては聞えがたし人そばへとありしその字落たるなるべし。上文そばへたる舎人わらは云々。又万十三丁、伊蘇婆比座與伊加流我等此米登とあり

○「武藤春曙」(一五一頁上)

①景雄云^(朱)。さりのつほとは佛舍利を玉壺に入たるがみゆるをいへる也。今もおほくしかする也／②盈云^(朱)。人ばへとのみにては聞えがたし。人そばへとありし、その字落たるなるべし。上文、そばへたるに人わらはるとあり。

【17】春曙抄八十二丁表六・七行目(「心もとなき物」八丁裏)上欄

〈頭注〉まつはくろめ 松葉黒一待齒黒兩説也 (藍筆消去線)

①まつはくろめ 兩説未穩當一季鷹云まつの二字一衍歟上の行の明る一まつのまつ誤てこゝ一には入れるなるへし一さて齒黒のひるをまつ一ほとを云一へる也(藍)／②濱云是又よくも一あらず今おもふに一上文の云ひつゝけ一たる例を考ふれ一はまつはまたを一書ひかめたる也又一の意にてよく聞ゆ(藍)

○「鈴木春曙」(中一一六頁)

①「訂」此の兩説也との註穩當ならず。季鷹云。まつの二字衍か。上の行の明るまつのまつ誤てこゝには入れるなるべし。さて齒黒のひるをまつほどをいへる也／②濱按。是亦よくもあらず。今思ふに上文の云つゝけたる例を考れば。まつはまたを書ひがめたる也。又の意にてよくきこゆ

○「武藤春曙」(一五一頁下)

①まつはぐろめ 兩説（○春曙抄注、松葉黒、待齒黒）未穩當。季鷹云 まつの二字衍か。上の行のまつ誤てこゝにはいれるなるべし。齒黒のひるをまつほどをいへる也。濱云 是またよくもあらず、今おも^{（ま）}うに、上文のみひつゞけたる例を考ふれば、またをかきひがめたる也。またのこゝろにてよくきこゆ。

【18】春曙抄八―十三丁裏（「心もとなき物」八―十丁裏）上欄

①傍註やかうのにはは野郊場也―マ説同し（藍）／②濱云やかうは野一干の音便也（藍）

○「武藤春曙」（一五二頁上）

やかうの庭 傍註やかうのには、野郊場也。萬説同。濱云 ややかうは野干の音便か。

【19】春曙抄九―七丁裏四行目（したりかほなるもの一九―七丁表）上欄

頭注 ふくつけさは 細流云^{（みづが）}貪る也。愚案^{（みづが）}一欲多き心也。遊仙窟^{（みづが）}一貪生^{（みづが）}とよめり

①遊仙窟^{（みづが）}一貪生^{（みづが）}とよめること一なし（藍）／②安昌按に靈異記^{（みづが）}一に貪^{（みづが）}とあり（藍）

○「武藤春曙」（一五三頁上）

濱云 貪生 遊仙窟此訓なし。

【20】春曙抄十一―十八丁表六・七行目（うれしき物十一―十六丁裏）上欄

よりも男はまさりてうれし。是が^{（ま）}たうは一必せんずらんとつねに心づかひせらるゝも^{（ま）}
外の人は黨せんかと氣遣はるゝ也（藍筆消去線）

〈頭注〉 是がたうは必せんずらん 其た^{（ま）}ばかる折に。かた一はらの人か^{（ま）}のたばからるゝ一人のかだうどせんと思ひ一しに。か

たうどせざりし一心なるべし。たうは黨^{（ま）}の一字也。字彙云^{（ま）}黨^{（ま）}一輩也。相助^{（ま）}一非為^{（ま）}黨^{（ま）}一云々

①是かたうは一或云たふにて答一なるへし注不甘心（藍）／②濱按當の字也一たうのかなにて一よし落くほに一いつしかぬすみ
出―て北の方のたう一せんとなん君は一のたまふといへは二云々（藍）／③安昌按當の字一いとよくあたれ一り落くほ二下巻一
いみしうねた^{（ま）}たかり一したう^{（ま）}すばかりの身にもかな二云々一同巻にいかなること一にあたり給ふらん一とあつまりて一なけく云々

一ともあり(藍)／④又答のことにいへる一は同じ巻に君一は更にたふし給一ふへきにもあらず一などありて當一と答のけしめ一
いとよくわかれ一たり(藍)

○「鈴木春曙」(下六四頁)

①「増」或云。たうはたふにて答なるべし。註は甘心せず。／②濱按。黨字也。たうのかなにてよし。落くほにもあり

○「武藤春曙」(一五七頁上)

これがたう 濱云 或云たふにて答なるべし。注不甘心當の字也。たうのかなにてよし。落くほに多く見ゆ

【21】春曙抄十一—二丁裏五行目(「御經のことにあすわたらせおはしまさん」十一—一丁)本文脇注

関根氏云ヨイ貞モナイガ(朱)
かしこきかほもなきかとおほゆれどみな

○「松平詳解」(「紅葉の巻」二二二頁)

○かしこきかほもなきかとおほゆれど云々とは、師關根氏いふ、顔もなきがと濁るべし。エライ顔もなきがと思へども、御歡めのまゝに引き續き車に乗りぬとなり、中納言中将將など美しき人の指圖に對して、女房等の見ぐるしきをいふなり。云々といはれたり。

【22】春曙抄十一—十八丁表七行目(「成信中將は入道兵部卿の宮の御子にて」十一—十五表)上欄

こまにといひてたてるかどあはれ也
門にや

盈云たてるかいと一あはれなりと有一けんいとこのいの字一脱しなるへし(藍)

○「鈴木春曙」(下一〇〇頁)

盈云。かとおはれ也とは。かいととありけん。いとこのいの字おちしなるべし

○「武藤春曙」(一五八頁下)

濱本 盈云 たてるがいとあはれなりとありけんいのおちしなるべし。

【23】春曙抄十二丁裏八行目（「舟のち。日のうらゝかなるに。」十二丁裏）上欄

なるを五六ぼうくといっむつなげ入いれなどする

①ほうくと一安昌按ほうくと一清ていふへし一今もぼんと投る一など云へり（藍）／②唐韻云蓬庫一和名布奈一夜加太（藍）

○「鈴木春曙」（下一〇〇頁）

②「増」唐韻に蓬庫。和名布奈夜加太とあり

【24】春曙抄十二丁裏三九行目（「四位五位は冬。六位は夏」十二丁裏）

四位五位は冬。六位は夏。との位すがた一なども。しなこそ男も女もあらまほしき一事なめれ。家の君にてあるにも。

※朱書割注

誰たれ一かはよしあしをさだむる。それだに物見知たる使ひ人ゆきて。をのづからいふべか一めり。ましてまじらひする人はいとこよなし。

※朱書割注 家ノ主トテモソノ家ノ内ノ人ノ服ノヨシアシヲ定ムル一ハデキガタシソレスラ他ヨリ使ニ来タル人ナドトカク△一評ストナリサレハマシテ殿上交リヲスル人ハ云々（朱）

○「松平詳解」（「紅葉の巻」三三九頁）

○家の主なりとても、一々其衣服のよしあしを氣をつけて吟味せさする事や出来べき。それにもなほ、物のよしあし見知りたる使人など來たる時は、おのづから、あの家の人の風體はよしとかあしとか批評すべしとなり。一家の内にも批評かくの如くやかましきものなれば、まして公に出て、殿上交際などする人は、ことに氣をつくべきを、もし氣を付けずして、なほざりならんには、いとこよなくわろしとなり。

以上、二四例を抜き出したが、全十二冊に亘って、藍筆によって浜臣と夏蔭を中心とした注が書き込まれ、少ないが、朱筆によって黒川真頼の注に関わるものが書き込まれている。

清水浜臣の注が加えられている春曙抄については、鈴木弘恭『訂正増補枕草子春曙抄』は緒言で「清水浜臣の考」を増補した旨を記すのみで、その本を明らかにしていない。松平静『枕草紙詳解』も緒言で黒川真頼に師事し、「はじめはたゞ師の説どもをばかの春曙抄にさし加へて、はやく世に示してんと思ひしも、過ぎにし年、鈴木弘恭といふ人の、さるいたづきしてすり巻にせるかあれば、今はたそれがあとおそひたりといはれなむもさすがにて」と、出版の経緯の中に記すのみである。この黒川真頼所持の春曙抄について明らかにしているのは、関根正直『補訂枕草子集註』で、

六、清水濱臣翁補註本

黒川真頼翁所蔵の本を借りて寫しぬ。奥書に「文化五戊辰年七月以清水濱臣藏本寫之畢」とあるは、何人の筆なるか。署名花押とてもなければ、其の人を詳にせず。間々黒川春村翁の筆跡も見うけられたり。後に真頼の門人鈴木弘恭もこの書を借り寫し、聊か補筆する所ありて、増補校訂枕草子春曙抄と題し、活字和本にして出版せり。

また、前田夏蔭の補注についても、

七、前田夏蔭翁校正補註本

此の書は翁の師濱臣の本によりて校訂し、春曙の註及び師説の誤りをも正し、自己の考説を随分に多く書き入れたる自筆本なりき。舊華族女學校（今の女子學習院）の藏本なりしを、予同校に奉職中寫し取りおきたり。^(注A)然るに惜むべし、同校失火の時圖書館全部焼亡して、原本も亦灰燼となりたれば、恐らくは他に流傳せざるべし。

と、明らかにしている。筑波大学図書館蔵の春曙抄の第一巻には、

夏蔭按に枕草紙といふ名はむかしよりきはやかに考明たりと見ゆるものなしたま〜一かたはら思ひよれる人のいへることもよく考へと、のへたりとみゆるはなく今おのれか一思ひよれる事ともつき〜にいふへし先此草紙のすゑに皇后宮に内大臣殿一の草紙を奉り給へるを内の御まへには史記といふ文を書せ給へるよし后宮のたまへるに清少納言の枕にこそし侍らめとて賜はれるにかくさま〜の事とも書るよし一みえたり此文によりて考るに其ころ世に枕草紙とて草

紙を枕にもすへくつくれ一るか有けるなりけり其さまはいかにといふに源氏物語の若菜の上巻に女三宮の御装束の一さまをいへる所に首書本紅梅にやあらん百卅二右きうすきくにあまたかさなりたるけちめはなやかに一さうしのつまのやうのみにみえてといへるは枕草紙とはいはされとも枕にする草紙のやうにいろくにか一さなれるをたとへいへるにて今世にやまととちといふ草紙のとちめのかたのまろくたれるに一よそへたるなりけりしかいふは榮花物語の若はえの巻に枇杷殿の大饗の時女房たちのうち出のさまをいへる所に小本きぬのつまかさなりてうちいたしたるはいろくの錦をまくらさうしに造り一てうちおきたらんやうなりかさなりたるほと一さく余はかりみえたりとみゆるこれ此名のものにみえたる一はしめにて言辞の若菜の文に合せ考ふへしかればさのみあつくたれるにあらねとも其一さまをたとへいへりこれは例にたかひておほくかさなれるかまことの枕草紙よりも高きさまなる一へきは一尺余りあるにてしられたり少納言の枕にこそし侍らめといへるを合せて思ひやるへし一文政十一年戊子二月菅原夏蔭しるす

卷二の巻末には、

文政二年己卯初冬廿一日校讀終前田夏蔭識

卷十二の裏表紙見返しには、

文政三年十二月會讀以証本校正畢 前田 夏蔭

とある。そして、架蔵本には第六冊（巻十一・十二）の後表紙表には、

文化五戊辰年七月以清水濱臣蔵本写之畢 長尾景寛

安政元甲寅年十一月鈴木直道蔵本にて写之畢 會田安昌

とある。これに、『泊泊舎年譜』⁷⁾から関係記事（文末にaとしたもの）と「武藤元信古注書入春曙抄」（文末にbとしたもの）から、春曙抄関係を抜き出して並べると、

寛政十二年（一八〇〇）孟春至七月枕草紙春曙抄十二冊を校合す（竹柏園蔵書誌） a 年譜

享和 二年（一八〇二）十一月九日吉田雨岡没す。年六十六歳

文化 元年（一八〇四）仲春枕草紙春曙抄を再校注して、私案を加ふ（柏）。a年譜

文化 元年（一八〇四）四月至十月泊酒舎に於いて、春曙抄と万歳抄とを対校す。（柏）a年譜

文化 三年（一八〇六）夏蔭十一月以前に入門か。a年譜

文化 五年（一八〇八）「文化五戊辰年七月以清水濱臣藏本写之畢 長尾景寛」（架蔵本卷十二後表紙表）

文化 七年（一八一〇）九月十一日枕草紙春曙抄の書入を終る。弘文莊待賈古書目録第四に、枕草紙春曙抄木村定良、

及権田直助書入本五冊あり。その卷十二の卷末に文化七庚午年九月十一日夜一過卒（朱）a年譜

文化 八年（一八一一）二月十三日村田春海没六六歳。

文化 十二年（一八一五）文化十二亥年二月三日書入畢。墨或朱清水浜臣説、借長尾景寛。蔵本写之及加愚案、木村定良

文化 十四年（一八一七）枕草紙春曙抄 文化十四年発会、十五年四月卒業す。a 23頁

文政 二年（一八一九）清水濱臣校本 文政二卯年閏四月十八日塗沫一過畢 b 127頁

文政二年己卯初冬廿一日校読終前田夏蔭識へ卷二卷末へ（筑波大学図書館蔵本）

文政 三年（一八二〇）文政三年十二月會讀以証本校正畢 前田識へ卷十二の後表紙表へ（筑波大学図書館蔵本）

文政 七年（一八二四）閏八月十七日清水濱臣没四九歳

文政 十一年（一八二八）文政十一年戊子二月菅原夏蔭しるすへ卷一へ（筑波大学図書館蔵本）

天保 八年（一八三七）夏蔭二月七日狩谷望之所蔵本読み合わせ b 125頁

嘉永 五年（一八五二）この年穂積（鈴木）直道浜臣本系和名類聚抄を書写巢（静）

穂積直道、鈴木雅八、御鷹方、前田夏蔭門人。（鶯園紅葉合）a年譜

安政 元年（一八五四）「安政元甲寅年十一月鈴木直道蔵本にて写之畢 會田安昌」（架蔵本卷十二後表紙表）

元治 元年（一八六四）八月二六日前田夏蔭没七二歳
明治二八年（一八九五）正月二一日會田安昌没六四歳
となる。

架蔵本の藍筆の大きな特徴は、【07】【10】【11】【14】【15】【19】【20】【23】に上げた安昌の注であろう。浜臣の許で会読が催され、補注された春曙抄に、引き続き夏蔭の許で会読が催されて補注されていく、注釈の成長が見られる。一例現代の注釈と比較してみよう。改めて、【15】を掲示すると、本文には、

礼版
らいはんにもかひて〇ひイ（藍）一ろぎちかふも

と藍筆で、「〇ひイ」が加えられ、「てひろぎちかふ」に藍筆で合点がされている。そして、頭注空白に、藍筆で、

てひろきは 手廣歟

安昌云手廣もさることなから是はらいはんにもかひて句ひろきちかふも如是にてひろきとは落窪物語に典葉頭かことを云る条に立居ひろくほとに又たちるひろきてなどあるいつれも身のふるへるを云へればこゝもねんころに身をふるはして誓さまをいふか

とある。この箇所の解釈の揺れは、萩谷朴氏によって詳しく論ぜられている。掻い摘んで引かせていただくと、

五体投地の姿よりして清水浜臣が「礼盤に向かひ、手広き」と句読したり、山岸徳平氏が「礼盤に、掻いつき」の誤りかと疑う余地が出てくるのであるが、筆者は、「かひろぎ」の「か」は、「か細し」「か弱し」「か黒し」「か寄りあふ」等の「か」と同じ接頭語であり、「ひろぎ」は四段活用の古い形の自動詞「広ぐ」の連用形であろうという仮説を立てるのである。（中略）として、法服の裾を広げ、五体投地例をする導師の、登盤以前の姿と見たが（諸問題⁽²⁹⁾）昭和36年3月〳既に第六十四段の「語釈」にも挙げたように、『和名抄』卷十一に「舩初教反訓船加比路久不レナリ安カラ」とあるのを引いて、揺れ動く意とする島田退蔵氏の説の語義基準は協力であり、登盤の阿闍梨の作法よりする歴史的基準に關しても、しば

しば上体を前に傾け（坐礼）、時には両手を膝前にのぼしそろえて、額を手の上まで下げる（伏礼）など、その上体は礼拝の為に前後に揺れ動き、種々の印相を結ぶ手は、恰も印度舞踊の舞いの手の如く、左右に展べ動くこともあって、阿闍梨の上体は大いに「かひろぐ（揺れ動く）」わけであるから、集成頭注には、諸問題⁽²⁹⁾の仮説を撤回した。⁽⁸⁾

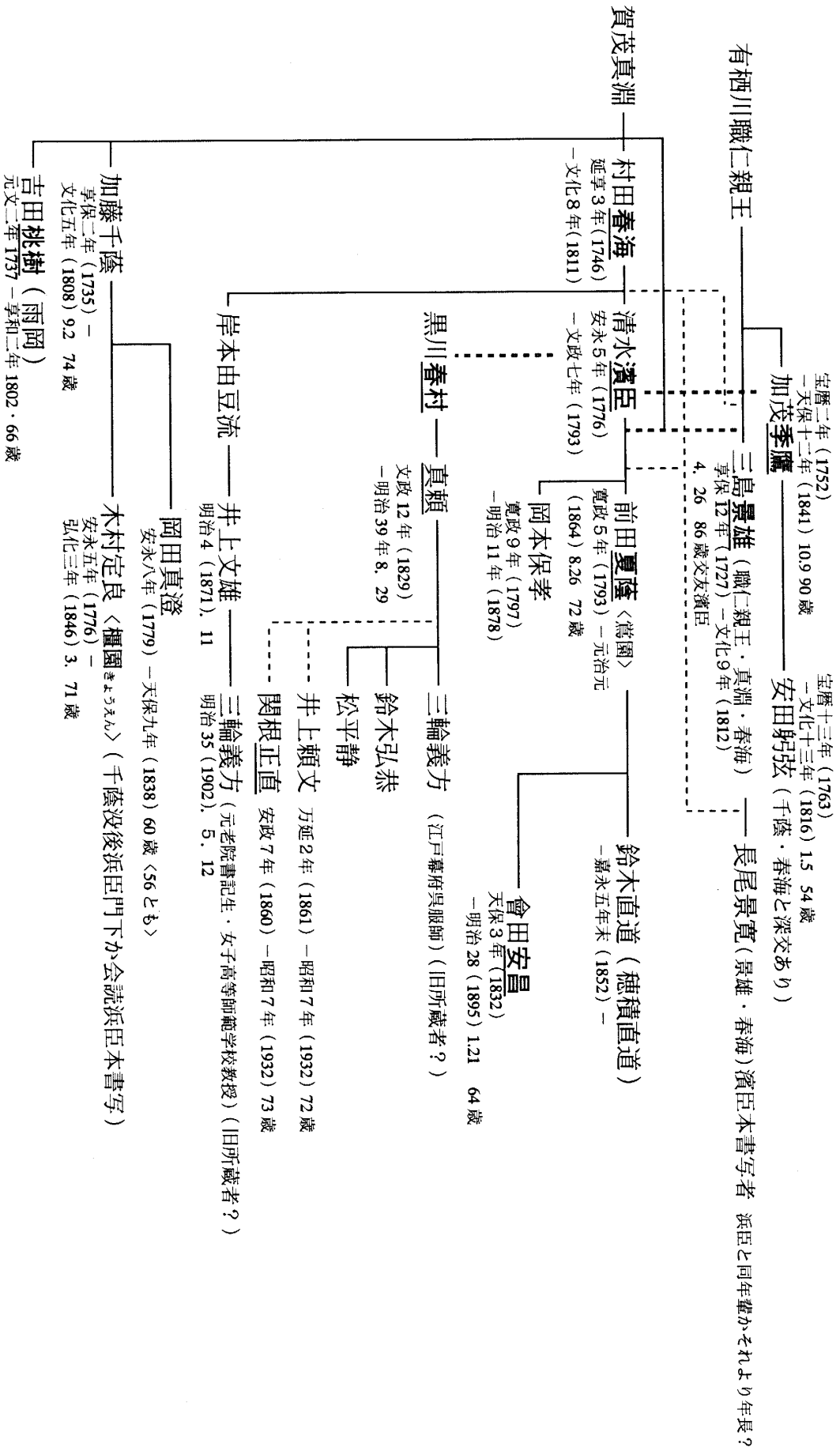
とあって、ここは「らいばんにかひろぎちかふも」（三巻本一類二類本）として、「礼盤で身体をゆすり動かし誓うという」解釈に決着が付いているが、春曙抄の本文から、「ひろくきちかふ」と、推論していったことは会読による解釈の発展と認められるのではないだろうか。浜臣の許、泊酒舎での何度かの会読、夏蔭の許での会読、そして、黒川真頼の許での会読が行われたのではないだろうか。会読については、本居宣長が『玉勝間』「八の巻」の「九 こうさく くわいどく 聞書」で、「今やうの儒者などは、よろしからぬわざとして、会読といふことをぞすなる、そはこうさくとはやうかはりて、おのくみづからかむかへて、思ひえたるさまをも、いひこゝろみ、心得がたきふしをば、とひきゝ、かへさひもして、かたみにあげつらひ、さだむるわざなければ、げに学問のために、よろしきわざとは聞えたれど、それさしもえあらず、よの中に此わざするを見るに、大かたはじめのほどこそ、こゝかしこかへさひ、あげつらひなど、さるべきさまに見ゆれ、度かさなれば、おのづからおこたりつゝ、一ひらにても、多くよみもてゆかむとするほどに、いかにぞやおぼゆるふしくをも、おほくなほざりに過すならひにて、おほかたひとりゐてよむにも、かはることなければ、殊に集ひたるかひもなき中に、うひまなびのともがらなどは、いさゝかもみづから考へうるちからはなきに、これもかれも聞えぬことがちなるを、ことごとくとひ出むことつゝ、ましくて、聞えぬながらに、さてすぐしやるめれば、さるともがらなどのためには、猶講釈ぞまさりては有ける、されどこうさくも、……⁽⁹⁾」と、批判的であるが、宣長の弟子の田中大秀の『竹取翁物語解』が、小山儀の『竹取物語抄』の補注から、幾度もの書写増補を繰り返して、そして、巨勢健冬、吉田千足、安達稲直、長瀬俊香らとの読み合わせによって成ったように、⁽¹⁰⁾ 浜臣補注の書写、夏蔭補注の書写と浜臣を中心とした会読、夏蔭を中心とした会読との組み合わせが、解釈を深めていったのであろう。

(注)

- (1) 二松学舎大学論集47号(平成一五年度)平成一六年度三月
- (2) 鈴木弘恭『訂正増補枕草子春曙抄 全』青山堂書房 明治四一年一〇月/初版/明治二六年五月)發端四の頭注
- (3) 岸上慎二「武藤元信古注書入春曙抄」『増補国語国文学研究史大成6 枕草子徒然草』(昭和五二年一〇月 三省堂 初版昭和三五年一月)
- (4) 岸上慎二「前田夏蔭書入春曙抄」『増補国語国文学研究史大成6 枕草子徒然草』(昭和五二年一〇月 三省堂 初版昭和三五年一月)
- (5) 松平静『枕草紙詳解』明治三三年二月 誠之堂書店
- (6) 関根正直『補訂枕草子集註』思文閣 昭和五二年一〇月(初版 六合館 昭和六年二月)
- (7) 『泊酒舎年譜』丸山季夫著 私家版 昭和三九年二月
- (8) 『枕草子解環 三』同朋舎出版一九八二年一月 七一・七二頁
- (9) 『本居宣長』日本思想大系40 岩波書店 一九七八年一月 二四四頁
- (10) 拙稿「田中大秀『竹取翁物語解』開板への階梯」実践女子大学文芸資料研究所「年報第十九号」平成二二年三月

(注A) 平成一四年度中古文学期大会春曙文庫展示資料中、展示№一四「柿谷文庫蔵。春曙抄。関根正直による諸注書入本。」がこの時の関根正直の書写した
ものか。

濱臣の学統と交友



(注) ○○ (名に下線付き) は架蔵本に注が見られる人物